

吉備国際大学研究紀要
 (社会福祉学部)
 第20号, 109-118, 2010

幼児教育における年中行事から見る多文化教育

秀 真一郎

Multicultural Education in yearly events for Early Childhood Education

Shinichiro HIDE

Abstract

This paper is aim to promote multicultural experiences to Japanese infants. Japanese infants also have a lot of situations to meet people who have different cultural background. Globalization in Japan is coming to every single Japanese people. The best way to think about our future is to think what the globalization is for Japanese. Early experiences make children accept differences from other cultures. In this paper, it is very significant to approach multicultural experiences from yearly events. Yearly events are very close to Japanese infants' lives. It is very easy to get multicultural ideas for Japanese infants from yearly events. Understanding different cultures helps prejudice reduction. Pleasure of differences leads to pleasure of knowing. Multicultural experiences help children to find their own future.

Key words : Multicultural Education, Yearly events, Difference, Experience

キーワード : 多文化教育、年中行事、違い、経験

1. はじめに

現在、日本におけるグローバリゼーションの波は着実に押し寄せておる。法務省入国管理局から平成20年末現在における外国人登録者統計が発表された。統計によると、平成20年度末現在では外国人登録者数2,217,426人と総人口の1.74%となっており、過去最高を更新している。さらに、過去10年間の外国人登録者数の推移は右記の表からもわかるように、増加の一途をたどっている。

これが意味するものとは、日常生活の中で違う文化、違う文化背景をもった人との触れ合いが容易になったということである。さらには幼児教育現場に

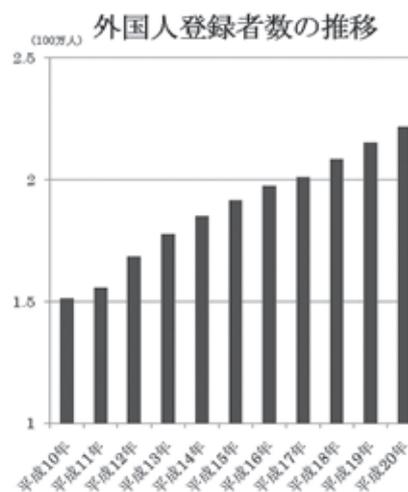


表1 外国人登録者数の推移

において、子ども達における異文化の接触が容易になってきたということが挙げられる。日本に長期滞在する外国人登録者の中には、妻子と共に生活をしている人が多数いることが予想される。その子ども達と生活圏内にいる日本人の子ども達との間に関わりがあっても不思議ではない。

幼児教育現場における多文化教育は、もはや特別な地域における特別なケースではなくなっている。さらに言えば、この機会こそ押し寄せる波のような日本におけるグローバル化に対する、進むべき道なのではないだろうか。様々な文化的背景を持った人たちと触れ合う機会が増えてきた今、日常の経験として意識することで自らの経験を“生きる力”として身につけていくことができると考える。

しかし、ただ単に多文化教育実践を幼児教育現場に付け足すだけでは意味がない。そこには、当然多文化教育の位置づけを考えておかなければならない。教育用語辞典において、「多文化保育」と「多文化理解」を次のように説明している。

多文化保育

国際化、情報化社会にあって、幼児期から異文化理解の芽を育てていく意義が説かれている。また、外国人労働者の子弟を受け入れ、日本人の子どもとともに生活を築き、共生していく必要性も高まってきている。異文化への無知や誤解が差別や偏見を生む原因であったことが反省され、多文化保育の実践では、幼児に他国の生活や習慣、価値観などを紹介し、体験させることで、異文化に対する共感や親しみを育み、言語、人種、民族、宗教、生活習慣などの違いを尊重する態度を養っていくことがねらいとされている。また、外国人のみならず、性や身体的能力（障害の有無）などの点で少数派（マイノリティー）に属する子ども達が、幼稚園や保育所における生活・学習の面で多数派（マジョリティー）に抑圧されることなく、

平等・公平な教育機会と経験が保障されるよう、保育環境を見直していくことも、多文化保育の重要な課題となっている。

多文化理解

多民族・多文化社会（国家）内での多民族・多文化間における理解として用いられる場合もあるが、国際化が進む今日においては、国家を超えて、さまざまな文化を理解することに用いられる。一つの地域社会、一つの国のなかで、民族、言葉、生活習慣など、多くの違いをもつ人間がともに生活するようになった今日、多文化理解の重要性は日毎に増大している。また、グローバルな視点から地球上にさまざまな文化をもって人間が共存しなければならない国際社会において、そうしたさまざまな文化をもつ人間が共生するためには相互理解が必要であり、そのための知識や技能が養われなければならない。これらの教育は、多文化理解教育や国際理解教育として、平和や人権を基軸に置いて盛んに進められてきている。だが、その道のりはけっして楽なものではなく、それには多くの誤解、偏見、摩擦が絶えずつきまとう。多文化理解は、それを乗り越えることを宿命としている。

幼児教育における多文化教育とは、文化間で見られる言語や習慣、食生活などの違いを知ることではないだろうか。世界中には様々な文化があり、その文化の中で生活していることで、自らの持つ文化とはなんらかの違いがあるのだということを経験することである。さらに、確固たる固定観念や偏見を作り上げていないこの時期だからこそ、この“違い”に対する理解や受け入れが、人に対する尊重や認めに繋がっていくと考える。

カルチャーショックとは、自らの持つ文化に対する違いを経験することから起こるものだとされている。

る。さらに、この違いが大きくなればなるほどそれを排除しようとする防衛本能が働く。知らないことが作り上げる恐怖とは、誰の身にも突然として起こるものである。しかし、幼少期におけるちょっとした経験がこのような“知らない恐怖”を減少させるのではないだろうか。幼児教育期にある子ども達にとっては、知らない恐怖はまだ存在していない。そのことから、幼児教育における多文化教育とは、子ども達により多くの“知る喜び”を経験することへの後押しを目的とし、その喜びの違いに対する“認め”や“尊重”につなげていくことだと考える。

どんな国、どんな文化においても平等に存在するものとは、時間の流れではないだろうか。例外なく平等に訪れる時間の流れにも、やはり区切りというもの存在し、区切りをもってして成長・発達を感じ取ることができる。この区切りにおいて、国や文化の特徴・歴史・慣習が表現されている。この区切りこそ行事としてとらえられている。世界中に存在する行事は時の流れの中で受け継がれ、また語り継がれていくものである。しかし、時と共に姿を変えたり、忘れ去られていくものもある。

「保育用語辞典」の中で“行事”について次のように記されている。

行事

行事は保育の高まりとして、日常生活の延長線上にとらえ、定められた日時に、特定の目標をもって行うものである。行事には、園行事、伝承行事、社会行事、宗教行事等があり、行事の内容は、ねらいに基づき必要とすることを取捨選択していく。昨年度の行事内容にあてはめるだけではなく、なぜ、このことが必要なかを検討し実施したい。行事を行う意味には、子どもの成長の節目を確認する、回を重ねることによって季節を感じ、時の経過を知る、入園してはじめて経験した行事に参加した喜びや感動が、次年度への期待、予測、工

夫などを生みだすもとなっていく等があげられる。

子どもが胸をはずませ指折り数えて待つように、それまでの、1日1日の楽しい経験を積み重ねることによって期待感を高め、待ち望む喜びをあげようように準備していく。練習を強要したり、必要以上に保育者が手を加えたりすることのないようにしたい。

幼児教育現場において、年中行事は大変重要な位置づけとされている。保育所・幼稚園における保育課程・教育課程においても、行事を位置づけることによって、一年のサイクルを打ち出しているというのが現実である。年間を通して、子ども達が触れる行事は多種多様であり、その数に限りはない。どのような行事を行うかは、幼児教育現場による実情や創意工夫によるものである。このことから、行事はそれを経験する子ども達にとっても大きな存在であり、欠かすことのできないものであることがわかる。

ここで、多文化教育と年中行事について考えてみたい。幼児教育における多文化教育は、非日常的で特別視するようなものであってはならない。このことから、日常的に出会う機会のある行事において、他の国の文化に触れることができるという点に着目することができる。親しまれている行事の中には、日本のものであるかのように感じられているが、諸外国の文化から日本の行事として定着したものもある。当初はその起源や実際の意味が伝えられていたが、今では行事としてその方法や流れのみが子ども達に楽しませられている。近年では、諸外国に根付いていた行事が新たに取り入れられ、日本の子ども達に楽しませられているものもある。

さらに、日本において古くから伝承され、大切にされてきた行事には、他国においても同じものが存在する。他国における日本と同じ行事の違い。類似

と相違から来る印象は子ども達にとって、違いを楽しむ・違いを認めるということを容易にさせると考える。

2. 広まりつつある新たな行事

日本の教育現場では、年中行事として根付き長年親しまれてきたものがあることは上述したが、これまでの日本にはないが、アミューズメントパークなどのイベントの一つとして、社会的認知を得てきている行事がある。それは“ハロウィーン”である。主に日本では人々が思い思いの仮装をして、お祭りを楽しんでいる。

しかし、その起源はキリスト教の万聖節の前夜祭であることは、あまり知られていない。仮装という非日常的な装いをすることで、特別意識が強まり、子ども達には楽しい一面のみが浸透しているのではないか。

元来、ハロウィーンは秋の収穫を祝い、悪霊を追い出すお祭りの日として始まったと言われている。この日は先祖の霊が家に帰ってくるという考えから、日本でいうお盆のような風習で、日本人にとってとても親しみが持てる点であろう。

行事を行う上で、さらにはその行事がハロウィーンのような新しい試みを行う上では、起源や意味を正しく子ども達に伝えるようにしたい。起源や意味を正しく理解することで、子ども達の中で取り組み方や楽しみ方が大きく変わってくるであろう。

先に述べたように、10月31日に子ども達は思い思いの仮装に身を包み、近所の家々を回る。ドアをノックして出てきた人に“Trick or Treat (だます？それとももてなしてくれる？=お菓子をくれなきゃいたずらするぞ!!)”とことばをかけ、子ども達も反応を楽しむことができる。迎える人は“Happy Halloween!!”と言って、準備しておいた飴やお菓子を子ども達に渡す。

ハロウィーンというイベントにおいて、もう一つ

欠かせないものがある。それはカボチャをくり抜き、オバケのように作った“ジャック・オ・ランタン”である。このランタンを作る意味とは、帰ってくる先祖の霊が迷うことなく家へ辿り着くための灯りであることも、異外に知られていないことである。さらに、オバケの仮装をすることにも意味がある。多くの霊が戻ってくるこの日、悪霊たちもいるという考えである。悪霊たちを驚かせ、追い払うために仮装するというのがその理由である。

このようなやり取りがハロウィーンにおけるよく見る風景であろう。このイベントをただ単なる楽しいものではなく、違う文化の持つ歴史的背景やその起源、さらに楽しみを伝えるためには、どのような活動を子ども達に提供するべきであろうか。

まず、ねらいとして、1. 日本にはない新しい行事に取り組み、類似性への気付きを楽しむ。そして、2. 実際に海外の子ども達が行う取り組み方を知り、行う。

活動として、カボチャのランタン（ジャック・オ・ランタン）やハロウィーンの様子を、写真やビデオなどで子ども達に見せ、どういうものなのかを想像させる。テレビを見て知っている、実際にハロウィーンパーティーを経験したという子どもは、その名前を容易に答えることができるかもしれない。

次に、ハロウィーンの起源をわかりやすく説明し、世界の子供達が実際どのようにハロウィーンに接し、親しんでいるのかを説明する。また、その子ども達が Trick or Treat (なんかくれ！じゃなきゃ、いたずらするぞ！) といいつつ家々を回り、お菓子を貰うことを説明する。

発展として、ジャック・オ・ランタンや様々なハロウィーンの装飾を作ってみる。ハロウィーンの起源やその意味を知ること、実際に行う活動にも動機づけが備わり、取り組み方の違いが期待できる。

最後に、Trick or Treat の発音を実際に練習し、仮装をしてみてハロウィーンパーティーを楽しむ。



形の良いかぼちゃを用意する。できれば、「おぼけかぼちゃ」と呼ばれているオレンジ色のかぼちゃの方が雰囲気があって良いでしょう。なければ、食べても美味しくなさそうなかぼちゃで作りましょう。



底を切り抜き、中味を取り出せるようにします。



中の種を抜き取り、顔などの細工がしやすいように、身を削って皮を薄くします。硬い大き目のスプーンなどで、少しずつ削るようにしてください。怪我をしないように作業するときには気をつけてください。
切り抜いた底も後で使うので、種などと一緒に捨てないように注意して！



側面(皮)がそこそこ薄くなったなら、表に目や口など切り抜く部分の下書きをします。細く傷をつけたり、細いペンで書きましょう。



果物ナイフなど小さ目のナイフで書いた線にしたがって、抜き取ります。ここでも怪我をしないように慎重に作業しましょう。



切り取ったかぼちゃの底に、下から内へむけて適度な長さ太さの釘を刺します。この釘にろうそくを刺すので、使用するろうそくに見合った釘を使います。釘が少し短いようならまわりを少し掘り下げる、ろうそくが長いようなら少し燃やして短くするなどして対応しましょう。



底をはめこんで、2,3箇所ガムテープで貼り付けます。台に置くと見えなくなりますが、顔の正面にガムテープが出ないように気をつけましょう。



目の穴からろうそくに火を灯します。
かぼちゃが焦げないように注意しましょう。

気を付けたいことは、ハロウィーンがまだまだ日本に馴染みがなく、子ども達に情報や経験がほとんどないという点である。本カリキュラムによってハロウィーンを知ることにおいて、伝えるべきことやその情報などは正確なものでなければならない。

3. 多文化的要素を持つ慣れ親しんだ行事

保育の現場において、行事とは一年の流れを決める大切な節目となっている。また、子ども達は行事に参加し体験することで、日本の持つ四季を感じ取ることができるといってもいい行事がある。それは“クリスマス”である。現在の日本では当たり前のように行われ、保育の現場では大きな行事の一つとして、“クリスマス”は定着している。

子ども達にとって、このクリスマスとはクリスマスツリーを飾り、クリスマスケーキを食べ、サンタクロースにプレゼントを貰うことが大きく占めているのではないだろうか。“ジングルベル”や“赤鼻のトナカイ”などのクリスマスにまつわる歌を楽しみ、ワクワクした気持ちを胸に眠りにつく。そして、翌朝目が覚め、枕元に置かれたプレゼントを見つけた時の興奮は、子ども達の心に深く残るも

図1 ジャック・オ・ランタンの作り方

http://www.mycal.co.jp/saty/3_weekly/0925/index4.html

のであろう。

それほどの影響力を持つ“クリスマス”とは、元来12月25日にキリスト教においてイエス・キリストの誕生を祝う降誕祭とされている。実際は聖書にもイエス・キリストの誕生日は記載されてはいないが、ローマ帝国において冬至の時期に太陽祭を行っていたことから、4世紀ごろからクリスマスをお祝いするようになったと言われている。日本においては、明治時代以降に人々に広まり、この日をお祝いし楽しむようになってきた。

しかし、すべての人に楽しまれている現在、クリスマスの起源や由来はあまり知られておらず、子ども達には親しみが無い。

また、これほど有名な行事（イベント）は数えるほどしかなく、クリスマスは全世界に浸透し、その国々の子ども達にも楽しまれている。

この2点を踏まえることで、クリスマスという行事において多文化教育要素をさらに深くすることが可能である。ねらいとして 1. クリスマスの由来を知ること、今までのクリスマスの過ごし方を意味あるものにする。2. 世界各国でのクリスマスの過ごし方から違いを認識する。3. サンタさんに手紙を送ることで、夢を膨らまし、現実のものとする。

活動としては、子ども達にクリスマスからイメージするものを想像させ、ひとりひとりの子どもが持つイメージを共有する。その後、クリスマスの起源・由来をわかりやすく説明し、子ども達の持つクリスマスのイメージを意味深いものにする。この点において気を付けたいことは、起源における宗教色が強いことではないだろうか。たしかにクリスマスとキリスト教は切り離せないほど、深い関わりを持っている。しかし、ここで大切なことは今まで子ども達が思い描いていた、“クリスマス”に対する“なんだかかわからないけど楽しい”というイメージに意味や理由を付け加えることである。そのためにも、起源・由来の説明には慎重になる必要があり、それぞ

れの年齢に合ったポイントを設定することが大切である。

次に、世界のクリスマスをビデオや写真などで紹介する。ここでは、日本のクリスマスの様子と類似している国を見せることで、その国に親しみを覚えることが予想される。12月という季節において、“雪”“寒い”というイメージは、日本の子ども達には馴染みがあり、当然という感覚であろう。まずは違う国であってもクリスマスを自分たちと同じように、同じ状況で楽しむ様子を知ることで、親近感を持つきっかけとなるのではないだろうか。違いの中から見ると類似性ほど、違いを認める足がかりになるものはないと考える。

文化が違って、慣れ親しんだクリスマスの雰囲気というのは子ども達にとっても強い印象を与えるだろう。しかし、その反対も考えられる。北半球に位置する国のクリスマスは、先述したように“雪”や“冬”が中心的イメージとなるが、南半球や赤道付近のクリスマスではその様子はまったく違う。

オーストラリアでのサーフィンをするサンタの様子を見せることは、日本にあるクリスマスの概念を覆す、さらには子ども達の驚きを生み出すことを目的とする。雪の上をトナカイの引くそりに乗って颯爽と走る姿とは、その様子が全く異なる。雪の上ではなく、波の上をサーフボードで滑る姿は、子どもにとっても印象深く強烈なイメージとして残るのではないだろうか。“雪の上のサンタ”と“サーフィンのサンタ”、この両者において気を付けなければならないことは、“どちらも正しい”という点である。サーフィンサンタに対して、全く違和感をもたない文化があり、正しいとする文化があることを説明することが大切である。

発展として、サンタさんはいる・いないという話題に移る。サンタクロースの存在を信じている子どもが多いと予想できるが、「お父さんがサンタだ

よ！」という発言もあるであろう。そこで取り組みたいことが、実際に手紙や絵を書いて送るという活動である。フィンランドには、サンタクロースの村が実在する。この活動を通して、サンタクロースのいる国・フィンランドに触れるきっかけとなることを展望として、活動を広げることが可能である。

子ども達にとっても親しみ深い行事だからこそ、クリスマスの真意・他国との類似性や相違点をしっ



図2 サーフィンサンタの壁面
オーストラリアの巨大アート <http://allabout.co.jp/travel/travelaustralia/closeup/CU20031219/>



図3 サンタの切手
サーフィンをするサンタクロースの切手（オーストラリア 1977）<http://yushu.or.jp/museum/kikaku/kikaku2/0401.html>

かり伝えたい。相違点においては、その違いが大きいものと予想されるので、あえて指摘するのではなく、ひとりひとりの感受性を尊重することが大切となる。サーフィンに乗ったサンタクロースは、日本の子ども達にとって、違和感に溢れたものであろう。しかし、違いに戸惑い、違いを楽しむことこそ、この活動の趣旨となるべきある。また、サンタさんへの手紙では、サンタさんからの返信を期待できるように準備をしっかりとしておくことで、子ども達の創造力をさらに膨らませる要因として活用されるであろう。

サンタクロースの住所

Mr.Santa Claus

Joulupukin Konttuuri

Napapiiri,96930 Rovaniemi,Finland

<http://oyajinokai.kir.jp/tubuyaki/200409.htm>

4. 世界各国にある同じ行事

世界各国、新しい年を迎えるということは、とても神聖なことではないだろうか。それぞれの国、それぞれの文化においても、1月1日をただ単なる時間の流れとしてとらえず、様々な意味合いをもって過ごす大切な日であろう。

“お正月”とは1年の始まりを迎えるにあたって、とても大切な行事と捉える文化もたくさんある。文化の違いから、“お正月”における風習や過ごし方にも違いがあるはずである。同じ行事であるにも関わらず違う慣習・食文化・意味を持つ“お正月”とは、まさに子ども達が世界を感じ、経験することを可能にする行事ではないだろうか。

さらに、世界を知ることによって日本における“お正月”に対する知識も深めていくことができ、“他を知り己を知る”ことに繋がっていくことができる。

核家族化が進む現代において、お正月の様子も随

分と変わってきたと言える。代々と受け継ぐことによって、慣習や方法だけでなく日本人としての心をも受け継いでいかなければならないと考える。

日本における“お正月”の起源とは、“年神様”を迎え入れる行事となっている。“年神様”とは亡くなった先祖の霊であり、豊作物の神だと考えられている。子孫に対して新しい年を与えるため、大晦日の夜には山から降りてくる。“年神様”を神聖に迎え入れることこそ、“お正月”の起源とされている。

“お正月”における様々な飾りも“年神様”を迎え入れるための飾りである。注連飾りとは年神様が鎮まるところとし、家の中が神聖であることを示す飾りである。門松には年神様の目印という意味があり、さらに一年の邪気や穢れを振り払う意味も含まれている。

おせち料理は日本におけるお正月とは切り離せないものであろう。おせちとは、「御節区」の略であることはあまり知られていない。料理の内容にも一つ一つ意味があり、まめに暮らすことの願いから黒豆、海老には長寿の願い、子孫繁栄の意味から数の子が入っている。

鏡餅も日本のお正月における風物詩となっている。餅は三種の神器のひとつである鏡と象っており、人の心を映す神様である鏡を二つ重ねることで、さらに縁起を担いでいるとされている。

これらの受け継がれていくべき伝統を現在の子ども達に伝えるためにも、今一度幼児教育現場における“お正月”という年中行事を見直すべきである。さらに、上述したように他の文化における違いを知ること、自身の持つ文化に対する心が育まれていくと考える。

この活動において設定されるねらいとしては、1. 時間の流れだけではない“お正月”を意識する。2. 多文化におけるお正月を経験することで、“違い”を尊重する心を養う。3. 様々な料理や遊びを経験し、お正月ならではの活動を楽しむ。

活動として、実際に自分達が経験した“日本の正月”をイメージし、お互いに発表しあう。そうすることで、お互いの持つお正月のイメージの共通点や、違いを認識することができ、日本のお正月でも違いがあることを知ることができる。さらに、日本におけるお正月の起源や習慣に対する意味をわかりやすく説明する。ここで“お正月”とは神聖なる行事ということが理解でき、それぞれの子どもが持つお正月のイメージがさらに膨らむと予想される。

次に、お正月特有の“遊び”を出し合い、実際に遊ぶ。現在の日本では、昔からの伝承遊びが失われつつある。そんな中、子ども達がどのような遊びをお正月にするか、ということを確認すると共に、失われつつある伝承遊びを知らない子ども達に伝承遊びの楽しさを伝える機会であろう。

お正月の伝承遊びとして子ども達に伝えたいものとしては、羽根つき・凧揚げ・独楽回し・福笑い・双六・歌留多などがあげられる。どれを取ってみても、一人では遊ぶことができないものであり、伝承遊びを継承しつつ子ども間における楽しみを作り出す関わりが持てるように援助することが大切となる。

発展として、世界各国のお正月を紹介する。今まで慣れ親しんでいたはずの日本のお正月においても、知らなかったことや初めての経験で驚きを感じてきたことが予想される。そこで違いや驚きを許容し、認める力をさらに育むためにも、違う文化におけるお正月が活動に含まれることとなる。文化によって違う“お正月”に対するイメージ・慣習・料理を経験することで、違いを知ることへの楽しさへとつながると考える。

各国のお正月

中国

旧正月と言って、2月が正月となる。お正月(春節)は、都市部では7日間、その他では15日間ほどである。街中で獅子が踊り、爆竹を鳴らすというよう

に、賑やかなものとなる。日本のおせち料理に代わるものが年夜飯と呼ばれる特別料理である。少なくとも8品を作り、それより品数を増やす時は偶数が好まれる。魚・鶏肉・豚肉の料理、もち米と8種類の本の実で作る八宝飯、白菜・高菜など縁起の良いことばが入る年菜などがある。魚料理は、家族がバラバラにならないようお願い、尾頭付きである。表側を食べた後、ひっくり返すことなく骨を取ってから食べるのが決まりとなっている。

メキシコ

大晦日は特別に、豚肉とコーンにスパイスで味を調えた「ポソレ」という辛いスープを作る。正月は新しい服に着替え、家族で抱き合うのが慣習となっている。昔は鉄砲を撃つ慣習が、いまでは規制があることから爆竹を鳴らす。

台湾

台湾の正月は2月である。日本と同じように、子ども達はお年玉を受け取る。初日は家族で過ごし、二日目からは嫁ぎ先から実家に帰ってお祝いをする。お正月はビーフンを作る。

フィリピン

正月にはココナッツ風味の餅を作る。鍋に餅を入れると最初は沈むが、煮ているうちに上がってくる。これは新年早々縁起が良いとされている。水玉がお金に似ていることから、洋服は水玉模様を着る。また、水玉も大きいものが好まれる。

ペルー

気分を一新するために、大みそかには古い洋服で作った人形を燃やすのが習わし。深夜から新年の朝まで、サルサやメレンゲに合わせて踊る人もいる。2日から普段通りの生活が始まる。

ドミニカ共和国

大みそかは外国に仕事に行っている人も実家に帰る、豚・七面鳥を料理して食べる。新年を迎えると、ラジオからはメレンゲ音楽が流れ、賑やかとなる。

オーストラリア

日本のように特別な行事はなく、夜中まで起きていたり、家族でパーティーをするくらい。季節が夏ということもあり、庭でのバーベキューが主流となる。

韓国

「マンドゥク」と呼ばれる正月料理がある。キムチを細かく刻み、豚肉や牛肉、豆腐・もやしなどを混ぜて作ったギョーザをスープで煮込む料理もある。テレビでは正月特番が放映され、「ウンノリ」と呼ばれるすごろくに似たゲームをする。

インドネシア

新年は1週間ほどの休みを取るが、特別なことは行わない。12月26日に断食明けとなるので、27日から2日間が盛大な断食のお祭りとなる。鯛を油で揚げ、香辛料で風味を付けた料理を食べる

アメリカ

1月1日になると花火や爆竹を鳴らす。ニューヨークのカウントダウンが有名で、時差のあることから、新年を迎えるたびにニューヨークでのカウントダウンが放映される。4大スポーツの一つであるアメリカンフットボールの全米大学チャンピオンシップがあり、多くの人はそのゲームに興じる。翌2日からは普段の生活が始まる。

タイ

4月に旧正月を祝う。この時に行われる水かけ祭

りは、国中で盛り上がる行事である。お寺に料理をお供えした後、皆で幸福の水を掛け合う。

5. おわりに

幼児教育期にいる子ども達にとって、年中行事とは単なる成長過程における“ある地点”や“区切りの時期”ではない。さらに言うならば、子どもの成長を区切るということは出来ない。今この瞬間があるからこそ、次に繋がる。その一瞬一瞬を大切に考え、今後の成長発達に繋げるためにも、年中行事をより意味のあるものにしていかなくてはならない。

多文化教育とは、単なる新しい知識を得る場ではない。多文化教育から得た“違いを認めること”“違いを楽しむこと”こそ、文化だけではなく人に対する尊重と認めに繋がっていく。固定観念や偏見を確立する前の段階に、このような経験をすることで今

後の人生における違いに対して受け入れる力を培っていくと考える。幼児教育における多文化教育の経験が、成長した時の知る喜びに大きな力となるであろう。

このような取り組みは、多文化教育という一見子ども達には馴染みのない様なアプローチを、年中行事という生活に深い関わりをもつ点から取り組んでいくことに特徴がある。慣れ親しんだ中にある全く新しい視点は、大きな違いを受け入れることをさらに容易にさせるであろう。慣れ親しんだ者の中から発見する新たな世界こそ、子ども達の心に自然と入っていきながらも、大きな印象を残すと考える。多文化教育という新しい世界のもつ力こそ、大きな可能性をもつ子ども達にとってさらなる方向性を与えるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 高橋司 (2006) 「子どもに教える 今日はどうな日? -年中行事がよくわかる本」 P H P 研究所: 東京 16-21 95-96
- 2) 高橋司 (2008) 「親子で楽しむものしり B O O K 食で知ろう 季節の行事」長崎出版株式会社: 東京 10-18
- 3) 山崎英則・片上宗二 等 (2003) 「教育用語辞典」ミネルヴァ書房: 京都 361-362
- 4) 森上史朗・柏女霊峰 等 (2004) 「保育用語辞典 第3版」ミネルヴァ書房: 京都 91
- 5) 「世界のお正月」広報よこすか WEB 広報 2001年1月号
<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/web-koho/0101/syougatsu/>
- 6) 「平成20年末現在における外国人登録者統計について」 法務省入国管理局 平成21年7月
<http://www.moj.go.jp/PRESS/090710-1/090710-1.html>
- 7) ボニー・ノイゲ 他 (2003) 「幼児のための多文化理解教育」谷口 正子 他 訳、明石書店: 東京、第3刷 7-10